

正宗白鳥全集

第七卷

正宗白鳥全集

第七卷

評論二

新潮社版

正宗白鳥全集 第七卷

昭和四十二年五月三十日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 大日本印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新 潮 社

〒東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部(三)二六五二一
編集部(三)二六五四二
振替 東京四一八〇八番



亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集

第七卷

編集

中島河太郎

山本健吉

中村光夫

小林秀雄

監修

河上徹太郎

第七卷
目次

作品の健不健	二
瑣言	二三
讀書餘感	二三
現代の新體詩人	二四
文士劇を起すべし	二五
文壇片々録	二七
小説界新陳代謝の期	二八
文士と虚榮心	二九
文壇所感	二九
ゲーテ	三〇
戦時の文學	三三
小説家の盛衰	三三
年少者に小説を讀ましむる可否	三四
感じたるまゝ	三五
ダンテ	三六
感想録	三〇
エミール、ゾラ	三四
虚無思想の發芽	三九
隨感錄 (A)	四一

隨感錄 (B)	四二
机上雜感	四三
發賣禁止	四四
新聞と文學	四六
靜的に物を觀る	四八
藝術上の懷疑	五〇
人物を描く用意	五一
「死の如く強し」	五三
『サアニン』雜感	五五
今年の小説について	五八
文藝雜話 (A)	五九
文藝雜話 (B)	六二
最近の文壇について	六三
雜文 (シェイクスピア)	六四
批評と出世	六七
ポーについて	六八
櫻の園など	七〇
通俗文學その他	七三
白鳥雜筆	七八

天分と修養……………	八	漱石と潤一郎……………	一七
民衆藝術雜言……………	三	「明治文學研究」……………	一四
他人の目と自分の目と……………	六	沙翁から日本へ……………	一八
發賣禁止について……………	六	最近の收穫……………	一四
明治の基督教文學……………	九	文學評論……………	一八
探偵小説雜感……………	九	明治文學概説（後期）……………	一六
ダンテについで……………	三	諷刺小説についで……………	二九
綠蔭閑語……………	一〇	チエーホフ論……………	二六
フローベルについで……………	二二	「悲劇の哲學」解説……………	三〇
肺患に倒れた明治の文人……………	二三	「死」を描いた文學……………	三六
イブセン劇……………	二四	季冬の戯曲……………	三三
雜感……………	二六	史記について……………	三三
讀後感……………	二七	不安の文學……………	三三
明治劇壇總評……………	二三	歴史を讀んで……………	三八
銷夏雜記……………	二五	回顧一年……………	四三
『試嘗』感……………	二四	天才の作品……………	四六
西洋の文豪と女性……………	二五	「日本浪漫派」その他……………	四九
藝術界の回顧と展望……………	二五	アミエルの日記……………	五三
文學雜感……………	二五	文藝隨筆……………	五三

少數の讀者……………	二五八	個性の強い文學……………	三二一
「惡靈」について……………	二五七	空想と現實（人麿）……………	三二五
ニイチエについて……………	二五四	『守錢奴』その他……………	三二九
生田長江の「谷崎論」……………	二五三	古典の鑑賞……………	三三三
ユーゴー追憶……………	二五七	二葉亭四迷に關聯して……………	三三八
『オセロ』について……………	二六六	讀書雜感（A）……………	三三三
モラエスと魯迅……………	二七三	讀書雜感（B）……………	三三六
文學の萎縮……………	二七三	文學人の態度……………	三四〇
諷刺文學……………	二七五	文學に於ける「解決」是非……………	三四三
志賀氏と萩原氏の感想……………	二八三	モウパッサン（一）……………	三四九
トルストイについて……………	二八五	モウパッサン（二）……………	三五八
机の上……………	二八七	——「女の一生」——……………	
コクトオの世界一周……………	二八八	モウパッサン（三）……………	三五五
小説の將來……………	二九一	——「死の如く強し」——……………	
イブセン劇を見て……………	二九五	モウパッサン（四）……………	三七〇
古典の現代化……………	二九五	——「ベラミ」に就いて——……………	
批評數片……………	二九七	私小説の魅力……………	三七七
外國文學鑑賞……………	三〇一	批評について……………	三八二
文學と精神修養……………	三〇七	小説の魅力……………	三八六

文學放談……………	三九三	ワイセツ文學など……………	四三六
小人の文學と人生……………	三九九	「沒理想」論爭……………	四四三
小説の大道……………	四〇一	愛山と透谷……………	四四九
政治と文學……………	四〇三	文學批判……………	四五五
批評家無力……………	四〇〇	文學の行衛……………	四六三
ノーベル賞と日本の文學……………	四〇三	歴史小説をめぐつて……………	四八〇
實名使用小説……………	四〇四	端物小説の衰退……………	四八四
藝術の魅力……………	四二九	小説是非……………	四八六

解題……………

中島河太郎…………… 四九一

評論 (二)

作品の健全不健全

聞くならく、古昔希臘の民はネメシスといふ女神を有せりき。彼れは人界に於ける一切の不權衡を正さんとして、常に幸福の神に追隨し、幸福の神が對者の眞價如何を顧みずして福を分かつこと濫りなるを見ては、則ち己れまた理非の外に富者を推倒して之れが平準を保つを任とせりと。かのポリクラテスの如きは、其の犠牲たりし一例にして、日に月に幸福踵を接して來たり、權勢富貴彼れが一身に蟠集するにあたりては、知人皆彼れが上に遅かれ、疾かれ、大悲運の落ち來たるならんと豫想し、莫逆の友すら、彼れを見捨てゝ顧みざりき。彼れ亦將來の惡運を未發に防がんとして、藏せし寶石珠玉を海水に投ぜしも、悲しい哉漁夫網して再び之れを得、以て舊主に返へせしかば、彼れは絶望落膽の極遂に身を運命の

手に委ぬるに至りぬ。其他ライカーガス、ベンシユース等の英傑が節慾に過ぎて斃れしは史上の事實にして、希臘國民の以て自から戒むる所なるが、其の精神、劇詩に及びて、ヒツポリタスといふ者が微塵の汚濁をも厭ふ純潔の信念を持せしため、稍々酒色に耽ることの却りて宗教上の義務たるを信ぜし徒の豫言的中し、あさましき最後を遂げしと描ける劇詩あるに至りては、今日の讀者が一驚を喫する所なり。

さもあらばあれ、ネメシスが極端を惡むの思想は今の我が文壇に新しき生命を有すること甚だ多し。其の著き一例は、作中の人物にジャスチフケーションの足らざることと是れなり。世人多くは作品の材に道德的價値を附して、彼れは狹斜小説、闇黒小説なるが故に不健全、此れは宗教小説光明小説なるが故に健全なりといふを知る。而も眞の健全と不健全とが其の外にあるを覺らざるなり。『戀と戀』が女主人公の行爲にジャスチフケーションを加ふることの足らざりしは、其の作の一部に不健全といふ批難を招きし所以にあらざるや。溫かき詩人の同感で、罰を起せし罪、果を生ぜし因をも理想化するに至りて、始めて作は健全の域に入るなり。實惡イヤゴ。シャイロツクの如きすら、恕すべきの餘地ありて、マローの惡漢、ミルトンの惡魔の類にはあらざる所に、人間を描けるの價値存す。ひたすらに賢なるもの馬琴等が作中の人物の如きは、ネメシスの爲に呪咀せらるゝものなること

勿論、ひたすらに悪なるものまた健全なる人間にあらず。子女は常に善人にして、舅姑は常に一點の涙だに無きが如きもの、豈健全の作といはんや。要するに如何なる作といへども、之れが健全は材料の善惡にあらずして、ジャスチフキケーシヨンの偏する与否とにあるなり。

瑣言

正統派の徒が信仰する、神が七日間に世界人類を創造したといふ説を、反對派は嘲つて宇宙創造の太工説カパンギンシヨウと名づける。これは同じ有神論にしても神が萬物の萌芽を造つて、其の自然に開發するに任かせたといふ發生的の説に對せしめたのであらう。誰れであつたか英國の評家が、エリオットの小説は構成的でプロンテの小説は創成的だと評して居たが、是れはおのづから第二の造化たる詩人の上に如上の二法をあてはめたものと見られる、本元の造化は何れの法によつたにせよ、兎に角これ丈の立派な世界を造つたのであるが、第二の造化は何れを取るべきか。エリオットも初はさうでなかつたが、修養三昧に柔しい心を碎き、哲學、科學など研究した揚句の果が、嵩ばつた材料を集めて伽藍を建築する方の専門

になつた。プロンテは或は深く自然に心を遣り或は世相の種種なるに泣き且つ笑ひ情緒哀怨の女性の質を失はないで己れ作中の人物となり、自然に其の行く所に行かずといふ風がある。今若しかの評家の言を推しひろむれば、エリオットは冷靜に局外から描寫し、プロンテは同化して筆を執るといふ意にもなる。勿論構成的の小説も、エリオット程になれば莊嚴な大伽藍となつて見ごたへもすれど、淺はかな人生觀や宗教觀を持つた作家が恣まゝに切り盛りして建てた和洋折衷の別荘ぐらゐでは有難くない、我が過去文壇の一葉はプロンテに比べて、規模は小さいながらも創成的で、自ら産み出して行く氣味があつた、我は作者の用意として寧ろ後者を取りたいと思ふ、非か。

但し主觀といひ客觀と云ひ、理想主義と云ひ寫實主義と云ひ、文學上の名稱別も随分殖えて來たが、造化の造つた宇宙萬物を分類するのは學者の自由として造化に取つては分類が何の累をもなさねば何の益をもなさぬ。作家は第二の造化として如何なる者でも隨意に産み出すがよい。初めから寫實主義と定めなくとも自然主義と定めなくともよいのである。

讀書餘感

美はしき月桂冠のいつか其の樞上を飾らんとは、非才我が如きの豫望する所に非ず。かの詩歌、我れ之れを愛すること甚しきも、必竟一種の遊戲文字のみ。我れは嘗て偉大なる價值を詩歌に付せしことなく、従うて世人の我が詩を稱するも貶するも、毫も顧みる所に非ざりき。然れども願はくば我が樞上に一欄はの刀劍を横へよ、我れはこれ人道の戰爭場裏に於ける一勇士なりと。嗚呼是れ實にヘンリツヒ、ハイネの抱負なりき。バイロンの云はんとせし所も亦かくの如くなりけんか。外に向うては凡俗の思潮に抗し、内に向うては、自己胸中の惡魔と闘ふ。之れを傳記に參し、之れを作品に徵するに古來知名の詩人、作家、多くは筆を執れるの武夫なりき。殊に十九世紀自意識の時期に生まれては、智に秀で情に富むの詩人、多く固陋なる在來の宗教、政治、道德を打破して、社會に瀰漫せる弊風を覆さんとするの軍士たりき。凡俗の間に流布せる信條制度に我が生を托する能はず、ひたすら幽玄の堂奥に我が求むる所を尋ねて、迷妄に泣き、光明にあこがるの人なりき。マツシュ、アーノルド氏が稱してハイネの

源流となせしゲーテが語に、予が國人に盡くしゝ所は正に其のリベレーターたりしに存すと。即ちハイネの所謂人道の戰爭に於ける一勇士とは、ゲーテ自身も亦任とせし所なりけん。顧みれば彼れが八十年の長日月、必竟安立の地を追うて走るの歴史なりしのみ。區々たる文字上の名譽何ぞこの偉人を累はすに足らんや。

偶々トルストイ氏の懺悔コンファッションを聞く。彼れ東洋の小話を拉し來たつて曰はく、人あり沙漠を旅して、猛獸に追はれ、逃ぐるに所なくして漸く路傍の古井戸に潜まんとす。然れども瞰下すれば大蛇口を開きて之れを待てり。幸に井中一莖の葛藤ありて纏かに身を支ふるに足る。旅人恐怖措く能はざれども、たま／＼其の葛の味甘きに心ひかれ、眼前の危難を忘れて時を過ごしぬ。偶々小鼠數尾群至して又甘き葛を噛みて止まず。旅人の命は葛と共に今や絶えざること一髮ならんとすと。是れはこれ佛徒等が好んで引きし寓言なり。而してトルストイ氏慨然として嘆じて曰はく、人生實に之れに類することなきか。我れ等はこれ際涯なき荒野の旅客ならずや。顧みれば人世は苦痛悲慘の穢土なり。然らば刃を執つて自から擬せんか。黒闇々たる死は亦我等をして之れを敢てする能はざらしむ。かくて或は家庭の和樂、朋友の交誼、肉慾、歡樂の甘き葛は身の一大事を忘れんとす。しかも歲月の鼠は一縷の命の綱を噛み切るを怠らずと。是に於いてか彼れは、發心し

て猛獸毒蛇も恐るゝに足らざる底の大安住を求めんとし、或は科學、或は哲學、或は神學の研鑽に従事すること幾十年。かの朴訥粗野のあらくれ男、幾度か泣いて長夜を明かせしぞ。彼れが小説は畢竟この苦闘の日誌と見るべき也。アーノルド氏が大文學を以て作家の品性の所産となすも所以なきに非ず。

翻つて我が文壇を見る。これに文明の批評家を以て責むるものゝ心は知らずといへども今の文壇果して幾何か人生を悟了せる。必ずしも宇宙と云はず、世界と云はず。我が今日の日本につきて何等の感想を懷抱せりや。はた又自己一身に對し何程の討究をかなしたる何程の反省をかなしたる。兒女を描きて精微に入り、若旦那遊治郎をうつして巧妙を極めんとするも、自家五尺の肉塊に對しては如何の解釋をなさんとするぞ。由來詩人の感觸は鋭敏なるべき理なり。一葉の落つるは、萬木に先だつて世の秋を知るがためならずや。彼れ等は未だ現下四圍のスヒンクスが語を聞かざるか、海外作家にも劣るまじき文才を抱きながら、遂にこれ巧妙なる藝術家、絶えて識者を満足せしむるに足るの大詩材を結撰し來たらざるもの、禍根いづれにありや。噫勤めんな世上の作家、希くは一たび其の筆を描き心を眞にして、人生如何を觀に來たれ。

或は曰はく、田畝の農夫、路傍の車丁もまた是の如きの觀

をなすことあり。作家ひとり是れなからんやと。而れども、天地は無限の意義なり。農夫車丁の觀ずる所は、識者が到達して解釋せんとする所のものよりも遙に膚淺なるを免れず。されば今一たび勸む觀じて而して人生の深き意義に達せよ。斯くの如くして始めて其の作に深さあるべき也。

現代の新體詩人

我國では新體詩を作つて生活は出來ぬのである。誠に詩人薄幸の嘆は古今同じき所であるが今日の我詩壇の有様では社會がこれに多くの報酬を拂はぬとて直に社會の薄遇を訴ふべきではあるまい。我新體詩は詩人仲間て上手だとか下手だとかいつてゐる丈で恐らくは一般讀書社會に面口がつて朗吟するものは少なからう。一言これを評せば今の新體詩は實に嫌惡すべきものである。一二の作家を除いては其の詩歌なるものは毫も文壇に加ふる所がないのである。如何にも明治文學で新體詩は最も進歩したものであらう。故外山博士時代の「我は官軍」より今日の失戀詩煩悶歌に至るまで進歩の實に夥しいのは事實だが、これは文字駢列術が巧みになつた計りで、眞正の詩人が増したのではない。